第132号

発行所
新潟県中魚沼郡
中里村公民館
毎月1回15日
定価 1部 5円

なかさと

私たちの村

人口	8,238
男	4,060
女	4,178
世帯数	1,704

5月1日現在

中里村の農業粗生産額

一ヵ年間に九%の伸び 作目別、花卉五十%の伸び

中里村の農業粗生産額を昭和四十年と昭和四十一年を比較して見ると一ヵ年間に約九%の農業生産額の伸びが見られたが、これらの伸びは農業生産増加よりも農産物価格の上昇によるものと思われる。これを作目別に見ると著しい伸びのあったものは花卉が五十%の伸びを示したこれはスズラン、朝鮮姫百合等の高級花卉の伸びと考えられる。次に上げられるものは工芸作物の九%の伸びであるがこれも面積の増加よりも価格の上昇と考えられる。養蚕についても八%の伸びが見られた。これらいずれについても価格の上昇と考えられる。次に畜産物であるがこの中で一番伸びの著しいのは役肉用牛で生産額にして四十三%の伸びであった。また肉豚は最近に至り豚の多頭飼育が盛んになって来て安値であったにもかかわらず、八%の伸びを示した。畜産物の中でその他の部門が約半分に減少したことが注目される。その他の作目とはうさぎ、及び山羊、綿羊、馬等が減少したものと考えられる。畜産物の生産額の中で、伸び率を考えると、畜産物が最近伸びたと言う雰囲気の中で、中里村の畜産物は約七%の伸び程度であった。次に中里村の場合別表耕種部門と養蚕及び畜産の全体の生産額の伸びであるが、約九%位の伸びであった。農家一戸当り農業粗生産額は昭和四十年に三十九万一千円のものが昭和四十一年には四十三万一千円で九%の伸びであった。また一方耕地十アール当り農業生産額三万九千円であったのが、昭和四十一年には四万二千円で九%の伸びで農業専従者一人当りの農業粗生産額二十二万五千円は、県平均三十万五千円に比べ十四%程度ひくい。

(注) 別表、昭和四十年については、農業センサス、昭和四十一年については、伸び率による比例按分の推計。

行政相談委員に

泉竜寺の関根和尚さん

生活保護や母子福祉、児童福祉、結婚の社会保険など社会保障の問題、恩給関係、農地、治水、道路、河川災害復旧、農業災害、教育、登記、税金、郵便国鉄、公社、公団、公庫、事業団など国の行政機関または、委任および補助にかかる業務について納得できないことがあったら、気軽に相談できる行政相談委員制度がありますのでご相談ください。

行政相談委員は行政監察局から委嘱されますが、中里村では田沢泉竜寺の関根隆光さんが、委嘱されています。

なお、民事刑事の裁判ごと、金銭貸借のもつれ、家庭内のもめごと、住宅のあっせん、結婚相談などはご遠慮願います。

【写真 行政相談委員の関根隆光さん】

中里村農業粗生産額 (単位百万円)

年	耕種 米	雑穀	イモ類	野菜	果樹	花卉	工芸作物	種苗木	計	養蚕	畜産 役用牛	乳用牛	豚	ニワトリ	その他	計	農業粗生産額
昭和40	311.2	10.4	16.0	29.6	0.5	1.9	23.6	17.5	411.5	38.3	8.5	3.2	21.1	13.3	1.2	47.3	497.1
昭和41	313.5	16.2	22.8	31.2	0.6	3.8	26.1	24.3	438.5	45.8	19.4	4.2	25.1	13.6	0.6	62.9	547.2

6月4日「県民スポーツの日」

中里村で郡市婦人排球大会

きたる六月四日(第一日曜日)は、第三回県民スポーツの日です。このスポーツの日は、昭和三十九年の新潟国体の輝かしい総合優勝を永久に記念し、広く県民の間にスポーツを普及して、体位体力の増強と、生活の明朗化をはかろうというもので、今年も県下十六ブロックにおいて、地域にふさわしい行事を四~五種目を原則としておこなうものである。中魚沼郡、十日町市ブロックでは、野球、卓球、籠球、排球の四種目の大会が行なわれることにきまり、今年度は必修種目として婦人による簡易バレーボールを行なうことになっている。排球大会は、わが中里村田沢中学校体育館で、籠球大会は川西町川西中学校体育館、卓球大会は、津南町下船渡中学校体育館、野球大会は、十日町市営グラウンドでそれぞれ、午前九時より開会されます。各大会の出場資格およびチーム編成は、排球一般女子(九人制現行ルール)一チーム、簡易バレーボール(改正前のルール)三十才以上(四月一日現在)の既婚者の各一チーム。籠球一般男子各一チーム。卓球一般男子、一般女子各一チームのほか、個人戦三十才以上三名、四十才以上三名なお個人戦においては男女を問わない。野球は男子年令二十五才以上で軟式ボール使用となっています。農繁期のさなかですが、村民のみなさまのご協力とご声援を、お願いいたします。

基礎数値

年	農家戸数	耕地面積	農業従事者数
昭和40	1,270	1,290	2,540
昭和41	1,270	1,290	2,540

生産性 (単位千円)

年	農家1戸当り農業粗生産額	耕地10a当り農業生産額	専従者1人当り農業粗生産額
昭和40	391	39	196
昭和41	431	42	215

花ひらく春

斎藤大馨

この冬はいく年ぶりかの永い寒さが続いた。立春が過ぎても雪々の連続で、暖かくはならなかった。花だよりが紙上をにぎわすようになった四月の声を聞いてからも、どちらかというと無情な春雨や春の風がつゞいたが、一雨ごとに気温もあがりそれにつれて妻有の里も本格的な春になり、若葉の空にひるがえる鯉のぼりを見ると、胸がすく。

雪に咲く梅の花、と昔からよくいうが、まさにその通りで梅花の上に今年も雪が時折り降っていた。でもその寒さの中で毎日一輪一輪と蕾をふくらませ、今まさに梅一輪~ほどの暖かさの通り、こゝ妻有の里は本格的な春と共に、万物すべてが躍動開始の時である。私の庭先にも梅の古木が一本ある。何代か前の人によって植えられたのであろう。一時は大分弱って今にも枯れるかと思われた位いだったが丹誠をこめて手入れをした。それに感心したか、近頃ではだんだんと又花を咲かせるようになり樹相もひとしを風流さをまして来たように思う。植木も人間の愛情によって美しく成長するという事実は、どんな木や花に対してもいえるだろう。

人間の愛情が、植物を生育させるのだ。人間もこれと同じことで子供を育てるにも、やはりきめのこまかい愛情で、世話したいものだ。それを怠って野放しにしておくと、いつの間にか非行少年にもなりかねない。

先年のことだったと思うが、東京で三人組の高校生が、強盗をやったことを思いだす。三人共経済的には、中流家庭の子供で貧困のための犯罪ではなかった。もちろん、貧困が一般の犯罪の温床になるが、三少年の非行化は、家庭の不注意と、愛情の欠如によって起ったようである。

春先はおしなべて、ウキ~する季節、各家庭とも子供たちの行動には細心の御注意を願いたい。子供は一家の愛情に包まれてこそ、共同社会の一員として成長しうる。それは梅の花の栄えるのと、同じ原則ではあるまいか。

残寳、寒苦の中からつぼみをふくらましている梅の木は、いく代か前の人が(白、紅梅を上げる)といって植えてくれたものであるとか聞く。私の小僧のころから年々見ているのだが白紅の中間色で咲いて見せてくれたことは一度もない。おそらく中間において今の紅一色に変種をつくり出したものであろう。突然変異で出来た花の色が、遺伝的に固定したものにちがいない。

生れ故郷の家の庭先にも大きな梅の木があった。これは正真正銘の紅梅で、まっ赤な花だったことを、懐しく思い出す。それにしても梅の木が、今のように綺麗なやさしい花を咲かせるには、遺伝と進化の長い長い年月が、たっていることだろう。それはとうてい、正確に測ることは出来ない。

この梅をここまで美しく育てたのは、全く自然の力で造化の妙に驚嘆するほかはない。私どもはたゞ~花の美をたたえ、花のいのちと融けあって、しばしの幸福をうれば、すなわち足る梅の一片の花びらに、天地の大生命を感じ、あらゆる神、仏の光を感得すれば、それが宗教でもあり、芸術心でもあろう。

一茎の野の花に、神の愛を感じ、草木のなかにこもる仏性を思うなら、それが本当に生きた宗教にもなろう。十九世紀にシェライエル・マッヘルがいったように「宇宙自然に対する帰依の心が宗教」と考えてもよい。

うぐいすの声を聞き、百花繚乱の春、半年の間冒の中に埋れて暮したものにとってはじめて味わえるこの幸福感がしきりに湧いてくる。連峰の残雪、又今まさに花は咲き終り青葉、若葉の好季節をむかえ、平和に幸せに皆が生き栄えるような、人間の春も早く来てくれるようにと祈る心がしきりと湧出する。自然も人事も、一如一連のものの様に思われる。花を愛する気もちは、神仏をしたう心と、しっくり連っている。

中里村の古文書より

桔梗ガ原 (4)

——田開稲荷神社について——

清津峡小学校 阿部九二三郎

神社の入口の家、この宮を何かと世話されている樋口寿吉氏宅には、天明六年(一八〇年前)摂津守荷田信禰信邦(せっつのかみかたのすくねのぶくに)名の正一位授与の書付けが所蔵されている。樋口翁の話によれば、伏見稲荷社から右の官位が許された折、伏見にちなんで宮の周囲にアナの木を植えたという。フシミ、コノミであった。そのアナが昼も小暗く茂って、稲荷の森をなしているのである。

今回はこれだけの前置きをして、例により古文書を一枚原文のままかかげる。

取極申一札之事(とりきめもうすいっさつのこと)

一、田壱反三畝歩 但、桔梗原鎮守稲荷社為修覆相除申(しゅうふくのためあいのぞきもうし)候。此小作米五斗づつ年々相計可申(もうすべく)候事。

右は桔梗原稲荷之義古来より八ヵ村鎮守と敬来(うやまいきたり)候処、猶又(なおまた)此度右場所御新開三相成リ候時引請号(ひきうけごう、郷の誤?)中相談之上一位之官位ヲ請(うけ)候二付、同人方より右社修覆料として書面之反歩寄附相頼ミニ付割除(わりのぞき)申候。依之(これにより)小作人之義は八ヵ村順番ニ出作致定之通(いたすさだめのとおり)、小作米五斗宛(ずつ)年年相計(あいはかり)修覆は勿論、春夏両度祭礼等之諸入用(しょにゅうよう)ニ取計可申(もうすべく)候。尤(もっとも)順番之義は当亥(い)年は干溝、来子(ね)年は小原、丑(うし)年桂、寅(とら)年藤原新田、卯(う)年田中、辰(たつ)年荒屋、巳(み)年通り山午(うま)年高道山、夫々順番ニ小作致定メ之年貢急度(ねんぐきっと)相計可申候。若(もし)後年至(にいたり)悪作等致候共(とも)引米は一切申聞敷(もうすまじく)候。且又、修覆之義は小破(しょうは)之節八ヵ村長(おさ)百姓相談之上、早速修覆致(いたすべく)候。依之(これにより)右八ヵ郷長(おさ)百姓一同相談之上、連印ヲ以取極(もってとりきめ)証文致置(いたしおき)申処如件(くだんのごとし)

文化十二亥年二月

魚沼郡田沢村枝郷
高道山 百姓惣代 作右衛門印
〃 永八印
〃 茂左衛門印
通り山 同断(どうだん) 伊兵衛印
〃 文治印
〃 吉左衛門印
荒屋新田 同断 六左衛門印
〃 直右衛門印
〃 仁右衛門印
〃 吉郎兵衛印
〃 三右衛門印
〃 佐右衛門印
〃 茂左衛門印
〃 林右衛門印
干溝 同断 与三左エ門印
〃 新左衛門印
〃 幸右エ門印
小原 同断 忠右衛門印
〃 孫左衛門印
〃 孫右衛門印
〃 吉左衛門印
桂 〃 義左衛門印
〃 伊兵衛印
藤原新田 同断 与右衛門印

前書の通り取極置候上は、後日混乱申間敷(いらんもうすまじく)候。為念仍而如件(ねんのためよってくだんのごとし)。

(同断とは右に同じの意味)

さて、右の文書についての解説は不要であろう。前おきと文書によって、田開稲荷神社の歴史は次のように要約できる。

宝暦十二年—右の祠建つ。
天明六年—正一位を許される。
文化九年—五郎兵衛大明神の石碑建つ。
文化十二年—八ヵ郷取決めによって田を寄付し、時々の修理、春夏両度の祭礼の費用に充当する。

(この稿は後日補足する/筆者)

水稲、蚕繭 共済金及び掛金

昭和四十二年産の水稲及び蚕繭共済金と掛金が二月の定例村議会において次のとおり決まりました。

◎共済金

水稲 一㌶当り 八十円

蚕繭 一箱当り 七千円

◎共済掛金（一㌶当り）

農家のみなさんが負担する額

▽共済目的 水稲

▽危険階級

・第一階級 地域（東田沢）掛金（五円六十三銭一厘三毛六）

・第二階級 地域（芋沢、田沢、朴木沢、市之越、白羽毛、程島、原町、新里）掛金（一円八十一銭八）

・第三階級 地域（千溝、荒屋、高道山、朴本沢新田、東田尻、角間、蓬沢、倉下、土倉、倉俣、芋川、重地、下山、西田尻、西方、小出、阿寺）掛金（一円四十銭七厘八毛四）

・第四階級 地域（如来寺、桂、上山、田中、小原、通り山、桔梗原、山崎、芋川新田、清田山、牧畑、新屋敷、本屋敷、堀ノ内、宮中）掛金（一円十三銭九厘六毛八）

今年は、前記により掛金をいただきますので、耕作地が、前年と比較して耕地の異動収量変更があるときは、部落の連絡員を通じて届け出るようにして下さい。引受面積並びに引受収量の決定期日は条例第二十六条により五月三十一日となっておりますので、期日までに届出して下さい。期日以後は受付できませんので念のため。

◎蚕繭掛金（一箱当り）

期別	地域	掛金
春蚕繭	村全域	一三三円
夏秋蚕繭（秋、晩秋を含む）	村全域	二五九円

◎徴収期日

水稲 第一期 6月25日限り

第二期 7月25日限り

蚕繭 掃立箱数決定後直ちに徴収する。

昭和四十二年度 耕転機耕賃と農作業賃金

昭和四十二年度の耕転機耕賃及び農作業雇傭料金について五月四日耕転機組合と各種組合の役員のみなさんがおあつまりになり、協議の結果、次のように協定されました。

◎ロータリー型

	料金
耕種	千八百円
田打	千二百円
荒代掻	一千円
植代掻	千八百円
	（一回で田植可能）

◎テーラー型

	料金
耕種	千七百円
田打	千四百円
荒代掻	千四百円
植代掻	千九百円
	（一回で田植可能）
耕転代掻	三千円
畑耕転	千五百円

◎徴収期日

水稲 第一期 6月25日限り

第二期 7月25日限り

蚕繭 掃立箱数決定後直ちに徴収する。

◎耕転代掻 畑耕転

▽その他の畑作業一日料金三千五百円。一時間五百円。

▽トレーラー一日料金三千五百円

▽団地十アール以下は二割増とする。

◎昭和四十二年度 農作業雇傭賃金表

	料金
▽田仕事	
男	千百円
女	九百円
▽畑仕事	
男	一千円
女	八百円

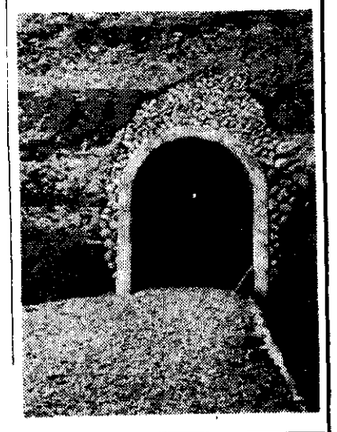
但し賄賃は二日二百円とする。賄付の場合は賃金表より二百円

芋川雪中隠道完成

昭和三十三年着工以来九ヵ年の才月を要し、総工費千三百万円が投じられ、昭和四十二年三月、芋川雪中隠道が完成した。ここは通称「へっつり」と呼ばれており、今期間はしばしばなだれがあり、危険な所であったが、隠道完成により、なだれによる危険はなくなった訳である。

十日町丸山工務所の請負。隠道延長二百七十一㍍、幅員は二㍍。そのうち、両側の側溝をのぞくと一・六㍍となっている。

【写真は完成した雪中隠道】



各地区で敬老会行事

青葉、若葉の好季節。恒例の敬老会が、貝野地区の四月二十七日をはじめ、田沢、高道山、清津峡、倉俣、土倉倉下の各地区で、婦人会、公民館共催で、にぎやかに開かれました。この敬老会は、村内七十才以上の人たちの長寿を祝い、又なが年社会に尽されたことに感謝するという主旨で毎年おこなわれていますが、当日は、婦人会の人達の手でつくられた手料理に舌づつみをうちながら、郷土の民踊や歌にと、一日たのしく過していただきました。【写真は手料理に舌づつみをうちながら、郷土民踊を熱心にみまもる老人たち。田沢地区にて】

必ず届出て下さい

いつも申し上げお願いしていることですが、国民健康保険被保険者に異動があった時は必ず十日以内に届出て下さい。

▽届出に必要なもの

◎転入、転出（保険証と認印）

◎出生、死亡（〃 ）

◎その他社会保険等に加入、脱退した時又は、その被扶養者でなくなった時（認印と国保及び社会保険の保険証）

◎生活保護法の適用が開始された時又は廃止された時。

役場、支所に世帯員の異動（前記の他、婚姻、世帯主住所氏名、変更等）届けをする際、必ず保険証を持参して、一緒に国保の届出をするようにして下さい。

▽別個の保険証を受けた場合

被保険者が旅行あるいは、その他の理由で長期間住所を離れた場合または修学中の者が別個の被保険者証の交付をうけた場合で期間の経過したものは、すみやかに役場に返還して下さい。

▽導く（又は県外）の医者にかかる人

医療機関にかゝる場合は必ず保険証を提出して下さい。又、県外の医者にかかろうとするときは事前に必ず役場に申し出て下さい。事前に連絡のない場合は全額個人負担となります。

飼犬は登録し、つないでおきましょう

最近、飼犬の野放しが目立ちこれらの犬の中には登録もしてなく、狂犬病予防注射もなされておらないのがいますので大変危険であります。又野放しにしておくため、畑の作物等を荒しまわるので、他人は非常に迷惑しており、役場に多くの苦情がまいっております。飼主のみなさん犬はかならず、丈夫なくさりでつないでおいて下さい。（このことは新潟県条例によって飼主に義務づけられ、これを、おこたると罰せられることになっております。）又登録をしていない犬は必ず登録し注射を受けて下さい。

社会教育の面から見た九州観光記（中）

教育委員長 藤田五郎

次いで十九代藩主島津光久公の別邸として万治元年建てた磯邸を見学する。純日本風な庭園で、桜島、錦江湾の風景をそのまゝ雄大にとり入れ、後方に磯山を配した素晴らしい趣きを見せている。斉彬公が蘭書で研究し日本で初めてガスをともしたという有名なガス灯仕掛けの石燈籠が印象に残る。この日最後のコース桜島は活火山として余りにも有名な存在である。有史以来、屢々噴火を繰返したが大正三年の大噴火で世界的に有名になった。当時小学校五年生であった私も新聞紙上で、その生々しい記事の記憶がある。この時の熔岩により八つの部落が埋まり、昭和二十一年にも二ヵ月に亘り噴火し、二部落を埋めつくし流れ出た熔岩によって桜島は大隅半島とつづいて半島となったのである。一週間前にも小噴火があったそうであるが、少量の噴煙を見るだけで平和な姿である。この島は火山としてだけでなく誇の島景観の島としても古来広くその名をうたわれており、周囲五十二㌔、面積八十平方㌔、人口一万二千人を有する夢のような火の島である。観光バスもフェリーボートによって乗りたまゝ渡る便利さである。島の婦人が島産の小粒の密柑をバスの窓際へ差し出して売っている。その売り声が何か宿命すけられた島の人達の生活の縮図であるかのように、哀調を帯びている。「いつ噴火するかわからない島に住んで居て心細くありませんか」ときけば彼女曰く「皆様が危険なこの島へ観光に来て下さる気持と同じでしょう」とうまいことを言う。長い間噴火に苦しめられてきたこの島にも、自衛隊の力によって桜島一周観光道路が完成しており、観光バスでこの道路を一周した。

さて九州特に鹿児島は、古来解せぬ言葉で有名であるが、今の若い人達は皆標準語を使っているので不便はない。却って越後の方言がわからないので、ガイドも土地の物売りも、困惑していたのが寧ろ滑稽である。この夜は陸軍の同期生で農協の組合長をしている下園君と国立病院の事務長をしている後藤の松君が、招きに応じて来てくれた。十時頃迄静かに盃を傾け懐旧談にふける。駅迄送って別れる。遠い鹿児島での面会であり、何時の日にか又逢えるであろうかと、別離の寂しさに浸る。お互が見えなくなる迄、手を振り合って別れを惜しんだ。

翌十四日は午前十一時半迄自由行動、正午鹿児島発の汽車で十六時九分熊本着直ちに用意してあるバスで市内観光に入る。歴史に名高い加藤清正公が築城しその後細川氏五十四万石の城下町として発展した、中九州第一の観光都市である。先ず熊本城を見学する。豊臣の恩顧を受けた清正公が徳川氏を相手に堂々と戦うことの出来るあらゆる作戦準備を整え清正公存命中は徳川氏をして一目も二目も置かしめたといわれるだけあって、大阪、名古屋、熊本の三名城にふさわしく戦術、戦略上から見てその築城振りは難攻不落を思わせる。又数々の遺品もよき参考資料であったが、時間がとぼしく割愛せざるを得なかった。この城は明治十年西南の役で焼失し、昭和三十九年天守閣が再建されたものであり、三の天守と二の城門、二の城門、長堀、倉庫は昔のまゝで重要文化財に指定されている。

引き続き水前寺公園を訪れる。この公園は東海道五十三次を形どった庭園で仲々こっている。池の水は地底から湧き出ているので清らかで実に美しい。池の辺に藩祖細川幽斎公が京都から移築した古今伝授の間と呼ばれる古建築があり、この部屋でお茶の接待を受ける。茶道に自信のある妻は別室で正式のお茶の接待を受け御機嫌である。薄暮宿舎に入る。この夜も陸軍の同期生で同区隊の金物問屋をやっている軍役タイプの豆塚君がたずねてくれた。逢く泡盛のお相手をする。酒には弱い私ではあるが話題がつきないので深更まで懐旧談に花が咲く。

（以下次号）

田沢中学校からのおねがい

現在田沢中学校グランドが校舎正面にあるため、歩行者、車輌がグランド内を自由に通っています。ところがそのため非常にグランドが荒れることになり、真に困っています。又、さらにグランドでは陸上部、野球部員が練習しているのですが、通行のみなさん、生徒達に危険があってはこまりますので、歩行者はプールわきの道路をぬけて田沢小学校うらの村道を通り、バックネットうらを通って中学校に、車輌は田沢小学校うらの村道から、グランド内のはじを通ってバックネットうらをぬけ中学校にくるように、おねがい致します。

なかさと文芸

〈五月投句〉

おの江

瞬だけ光る男ら春の田を開く　キミ

子供の日せわしくにぎる草の餅　高山

雪消えて土の香りに希望湧く　捨蔵

青葉潜て地を踏み我は農励む　キクノ

もやしそばしみ〴〵味わう春の宵　ミチ

薬師寺の古葉のくすぶる春祭　時習

手のひらに戯せて味わうほたんかな　潤一

主婦の座を離れて里の春祭　由記

想い出の季節はめぐる苗だんご　玉泉

児の幸を大気に祝う鯉のぼり　イシ

うど木の芽春の味覚の夕餉かな　海人

病棟をソット抜け出て草摘みぬ　高橋佳子

耕耘機あやつる嫁の健康美　閑史

たけなわの春老鶯の声さびて　一枝

灯に読めば武骨に写る春の掌　大泉

入学の妻の髪断つ灯に寄せて　涼子

夫子遠く川鳴りの中の根岸摘む　えつお

苗代の数条ひかり村静か　春雷

花に背を精農なるが故の貧　山崎了

山里の先祖の墓地はまだ白く　島田真二

三月半にして雪まだ深く　米蔵

幾世もの先祖の眠れる仏前に　新里

甚れる頭に心鎮すまり　吉楽千春

簾雪の里に育ちし村人の　厳宮中

雪へのロマンは生活の汗

雪深き妻有の里に植木屋は　色とりゞの春を待ちくる

春雨に今朝は野辺の彼方より　もや立ち登る暖春の朝

純白のつゝじは君が汚れなき　心の青春の鉢植の花

人生往来

◎誕生

子の名	父の名	部落名
斉藤 満	東司	田中
小林 寿江	勲	西方
南雲久美子	久男	小原
吉楽 雅典	正雄	上山
中沢 武貞	夫	田中
滝沢 佳子	光久	田中
江口 忠彦	思昭	上山
田中由美子	良一	上山
藤ノ木武志	晴繁	小出
鈴木 正	正平	倉俣
滝沢 正光	正喜	田代
竹藤 美和	安三	芋川
大島 悦子	賢一郎	牧畑
高橋 佳子	信雄	倉俣

◎高砂

			氏名	年令	部落
新郎	上原	文一(23)	上		山
新婦	保坂	良子(20)	芋沢		
新郎	大島	博文(21)	十日町	(25)	山崎
新婦	井ノ川カツ(23)		如来寺		
新郎	小林	和徳(24)	荒屋	(25)	如来寺
新婦	近藤	和子(23)			
新郎	上村	耕作(20)	千葉県	(27)	小出
新婦	雄口	和枝(20)	荒屋		
新郎	山本	輝正	村山ミツエ	(34)	東田沢
新婦					
新郎	中島	塩吉		(40)	堀ノ内
新婦	河部信太郎			(32)	新屋敷
吉楽	文市			(48)	宮中

◎駐車禁止のおしらせ!!

国道一一七号線 七川橋から荒屋神社前県道から陸橋下まで

駅通り、国道から陸橋下まで

近く駐車禁止になる予定です